

「君の天体現象を観測
する」深夜の天文台で
教授に処女カントを暴
かれ五回中出しされた
助手の話

「ッ♡ ひっ……せ、先生……っ♡♡」

望遠鏡の接眼部から額を離す暇もなかった。背後から伸びてきた長い指が、作業用ズボンの上からぴたりと股間を覆う。白衣に残るラベンダーの残り香。低く乾いた声。

「動くな。観測中だ」

ゴウン、と重い金属の軋みがドーム全体を揺らした。天窓のスリットが閉じていく。切り取られていた冬の星空が、金属の隙間から細く、細くなって——消えた。

赤色灯だけが残る。

直径十二メートルの鋼鉄の密室。標高一八〇〇メートル。最寄りの人家まで車で四十分。携帯は圏外。

鳴瀬冬嗣教授が、篠宮の肩を掴んで回転椅子に押し戻した。ガタン、とキャスターが鳴る。

「先生っ、観測中にスリットを閉じたら——」

「今夜の観測対象は変光星じゃない」

銀縁眼鏡の奥、赤色灯に染まった瞳が篠宮を見下ろす。長い指がベルトのバックルにかかった。かちやり、という金属音がドームの天井まで反響した。

「君の身体为天体現象を、今夜観測させてもらう」

「なに、を……っ」

教授の左手がポケットから一枚の紙を取り出す。健康診断書のコピー。三年前の日付。

「研究室の書類整理で見つけた。君がカントボーイだということは、三年前から知っている」

息が、止まった。

三年。この男はずっと知っていて——今夜のために、二人きりの観測日を組んだ。

博士論文の審査まであと八ヶ月。車の鍵は教授のポケット。逃げ場など、最初からどこにもない。

「……っ」

声にならなかった。恐怖なのか、羞恥なのか。お腹の奥がきゅん♡と疼いたのは——篠宮自身にも分からない。

教授が銀縁眼鏡を外した。赤色灯の下、裸眼の目が据わっている。学者の顔ではなかった。

ベルトが引き抜かれ、ジッパーが下りる。教授の長い指がズボンの腰に引っかかり、ショーツごと膝まで引き下ろした。

「やっ……♡♡　せ、先生……っ♡♡　見な——」

「観測対象を視認せずにデータが取れるか」

冷気が股間を打った。真冬のドーム、室温十度。剥き出しになった粘膜に冷たい空気が触れて、声にならない悲鳴が漏れる。

教授が片膝をつく。回転椅子に座ったままの篠宮の両膝を掴み、左右に押し開いた。

「閉じっ……やだ、やめてくださいっ♡♡」

太腿を閉じようとしても教授の指が膝裏に食い込み、びくともしない。ピアノも弾けるという長い指は、見た目から想像できない力で脚を固定していた。

ポケットから赤色フィルター付きのペンライトが取り出される。カチ、と点灯。赤い光の束が、剥き出しのカントを照らした。

「ッ♡♡♡」

(いやだ……っ♡♡ ライトで照らされて、全部丸見え……っ♡♡)

「粘膜の色調は淡紅色。分泌物は微量。左右対称。未使用の鏡面は曇りが無い——完璧な光学系だ」

教授が声に出して観察記録をつけている。涙がぼろぼろ溢れた。でも教授はそれを無視して、左手の中指をカントの外縁にそっと触れさせた。

「ッ♡♡ ひう……っ♡♡」

なぞるように、ゆっくり。外側の皮膚から粘膜へ、上から下へ。指先がクリトリスの包皮に触れた瞬間、腰がびくんっ♡と跳ねた。

「敏感な反応。ここが一次感応点か」

教授はその場所から指を離さなかった。爪の先で、ほんの軽く、かりかり♡かりかり♡と包皮の上から引っ掻くように擦る。

「っ♡ あ……っ♡♡ せんせ……そこ、だめ……っ♡♡」
(なんで♡♡ こんなちょっと触られただけで♡♡ こんなに……っ♡♡)

自慰の経験すらほとんどない。自分の身体がどこで感じるのか、篠宮自身が一番知らなかった。教授の指が暴く快感のひとつひとつが、初めての衝撃だった。

指が下へ滑る。カントの入り口に中指の腹がぬるり♡と押し当てられた。

「あ……っ♡♡ そこ……っ♡♡」

「挿入する。呼吸を止めるな」

ずぶ♡……と、指先が沈む。第一関節まで。粘膜が指を包み込む。きつくて、ぬるりとした圧迫感。

「ひ……っ♡♡ う……っ♡♡」

全身が硬直した。生まれて初めて、他人の指が自分の中に入っている。

(うそ……っ♡♡ 指が……僕のおまんこに……入って……っ♡♡)

「処女か。挿入抵抗が高い。ゆっくりいく」

第二関節まで。内壁がぴったりと指に吸いつき、ひくり♡ひくり♡と脈打つ。教授の中指は異常に長い。普通の人では届かない深さまで、じわじわと侵入してくる。

「お……っ♡♡ おく……奥のほう、なにか……っ♡♡」

指先が内壁のざらついた場所に触れた。教授の目が光る。

「反応があった。ここが感応点か」

二本目の指が加わった。中指と人差し指で、そのざらついた場所を挟むように、ぐりっ♡と押し上げる。

ぬちゃ♡

「ひぁ♡♡♡ やだっ♡♡ そこ、へんにな……っ♡♡♡」

(嘘……っ♡♡ 指二本でこんなに……っ♡♡ おまんこの中、ぐちゃぐちゃにされて……っ♡♡)

水音がドームの金属壁に反響した。じゅぷ♡ ぬちゅ♡ くちゅ♡——密閉された鋼鉄の球体が、カントから漏れるすべての音を拾い上げ、増幅し、天井から降らせてくる。

「や……っ♡♡ 音……聞こえ……っ♡♡ いやだ、こんな音……っ♡♡♡」

「ドームの反射率は驚くほど高い。君の内部で発生する流体音が明瞭に聴取できる」

教授が二本指をゆっくり引き、ぬちゅ……♡と押し戻す。引いて、押して。カントを出入りするたびに、ぬちゅ♡ じゅぷ♡ ぐちゅ♡と水音が鳴り、金属天井に跳ね返って頭上から降ってくる。

「お……っ♡♡ やだ……っ♡♡ 濡れて……止まんない……っ♡♡ 自分じゃ止められない……っ♡♡♡」

「分泌が始まった。光度曲線で言えば増光フェーズだ。極大に向かっている」

教授が回転椅子ごと篠宮を望遠鏡架台の脇へ押しやった。キャストが床を滑り、ガツンと架台の脚にぶつかって止まる。華奢な太腿を教授の肩に乗せた。

「せ、先生っ♡♡ そこに顔は……汚……っ♡♡」

「汚くない。試料を舐めて同定するのは地質学の基本だ。天文学者がやって悪い道理はない」

教授の顔が近づく。吐息が粘膜に当たった。それだけでカントがびくり♡と震える。

そして——舌が触れた。

ぢゅる♡

「っっ♡♡♡♡」

下から上へ。割れ目を一直線に這い上がる舌。粘膜を舐め上げられる感覚に、全身が総毛立った。

（ダメ♡♡ ダメダメ♡♡ 先生の舌がおまんこに♡♡ 舐められて♡♡ こんなの……っ♡♡♡）

声を殺そうと唇を噛んだ。だが教授の舌がカントの中に押し込まれた瞬間、堰が砕けた。

「ああ♡♡♡ やだあ♡♡ なか♡♡ 中舐めないでえ♡♡♡」

ぬちゅ♡　ちゅる♡　くちゅ♡　じゅぷ♡——舌がカントの内部を蹂躪する音が、ドーム全体に反響した。天井から、壁から、自分の身体の奥から、水音が四方八方から襲いかかってくる。

教授がクリトリスの包皮を舌先でめくり上げ、露出した突起をちゅぷ♡と吸った。

「ひぐっ♡♡♡」

腰が浮いた。教授の両手が腰骨を掴んで押さえつけ、逃がさない。舌と二本指の同時攻撃。カントの入り口を円を描くように舐め回しながら中に指を差し込み、引き抜いてはクリトリスを吸い上げる。吸いながら指をくいくい♡曲げて、さっき見つけたざらついた場所を直撃した。

じゅぷ♡　じゅぷ♡　じゅぷ♡♡——溢れた蜜が教授の手と顎を濡らしていた。

「おっ♡　おっ♡　おおおっ♡♡♡　せんせ♡♡　もうっ♡♡　なんか来るっ♡♡　こわい♡♡　こわいよぉ♡♡♡」

「来ていい。極大観測のチャンスだ」

教授が指の速度を上げた。ぐちゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡と三連打で内壁を擦り上げ、同時にクリトリスを舌先で弾く。

視界が白く弾けた。

「はびいっ♡♡♡♡　おおおっっ♡♡♡♡♡」

全身が弓なりに反る。カントが教授の指をぎゅうぎゅう♡と締め上げ、太腿がガクガク痙攣した。蜜が噴き出し、教授の手首を伝い、回転椅子の座面を濡らす。

初めての絶頂。名前も知らなかった快楽が、身体の内側から爆発して、理性を粉々にした。

(おっ♡♡ なに、これ……っ♡♡ おまんこが……止まない♡♡ ぎゅうぎゅうって勝手に♡♡ 教授の指、離したくないって……っ♡♡♡)

教授は舌で蜜を受け止めながら、指の刺激を緩めなかった。ひくっ♡ひくっ♡と痙攣するカントから、小さな絶頂を連続で搾り取っていく。

「ッ♡♡ ッ♡♡ もうっ♡♡ ゆるして♡♡ もうだめえ♡♡♡」

「初観測の極大等級を記録。——まだ続く。余韻の減光カーブも観測する」

泣きじゃくりながら教授の肩を押すが、力なんて入らない。教授がゆっくり指を抜いた。ずるり♡と白い糸を引く二本の指を、赤色灯にかざして眺めている。

「分泌量、粘度ともに十分」

教授が立ち上がり、ベルトを外した。ジッパーの金属音がドームに反響する。回転椅子にぐったりと沈んだまま、赤い薄闇の中で取り出されたものを見た。

(うそ……っ♡♡ あんな……あんなの……っ♡♡)

教授の外見からは想像もつかない。太く、長く、青黒い血管が皮膚の下で脈打っている。先端はすでに露出して、先走りの雫がてらてら光っていた。

(あの指で……さっき僕のおまんこ掻き回してた手で♡♡
今度はあんな太いの握って……っ♡♡)

「む、無理です……っ♡♡ そんなの入りま……っ♡♡」

「段階的に挿入する。急激なパラメータ変化は観測機器を壊す」

椅子から立たせ、望遠鏡の架台——赤道儀の金属フレームに向かわせた。冷たい金属パイプに両手を置かせ、腰を引かせる。掌に触れた鋼の冷たさに、全身が竦んだ。

教授が背後に立つ。腰骨を両手で掴み、先端をカントの入り口にぴたりと押し当てた。

「ッ♡♡♡」

さっきの愛液でぬるぬるに濡れた粘膜が、熱い塊の接触にきゅっ♡と竦む。先端の灼けるような熱さと金属パイプの凍てつく冷たさ。温度差で神経が滅茶苦茶になった。

「挿入する。呼吸を止めるな」

ずぶ……っ♡♡

先端が割り入った。処女のカントが力ずくで押し広げられていく。粘膜が肉棒の形に拡張される感覚。痛みがはっきり伝わった。

「いっ♡♡♡ た、い……っ♡♡ 先生、無理……っ♡♡♡」

「まだ三センチだ。全長の二十パーセントにも達していない」

冷静な数値報告。教授は腰を微動だにさせず、篠宮の身体が馴染むのを待っている。ただし左手は前に回り、クリトリスを指先でくるくる♡転がし始めた。

（痛いのに♡♡ クリトリス触られると♡♡ 気持ちいいのが混ざって♡♡ どっちか分からな……っ♡♡♡）

痛みの中に甘い痺れが割り込んでくる。頭が混乱する。カントの筋肉がふっ♡と緩んだ瞬間を、教授は見逃さなかった。

ずるり……♡♡

半分が入った。

「あ……あ……っ♡♡ おなか……奥のほう……っ♡♡♡」

「通過抵抗が減少した。内壁が受容体勢に入っている」

ゆっくりとピストンが始まった。引くとカントの内壁が肉棒にまわりつき、内側に引っ張られる。押し込むと奥の壁を圧迫する鈍い充満感。

ぬちゅ♡ ずちゅ♡ じゅぷ♡——粘着質な水音が金属壁に反響し、増幅されて天井から降り注ぐ。